

船を取りあげられたが、なぜそれを取りあげたのか、理由が明記されていないかった。その点の説明も欲しかったところである。

もつとも、右の指摘は、評者の本書を読んだ単なる感想に過ぎず、本書の価値を減ずるものには全くならない。もとより、評者の浅学非才により、編集者の意図を十分に汲み取ることができたか心もとなない限りである。この点、編集者や読者諸氏にお詫び申し上げる。

本書は、今後の八戸藩研究において大いに活用されることであろう。これまで俎上に載せられてこなかった史料が収録されていることで、新たな視角による研究の進展が期待される。膨大な史料の中からこうした史料を発見し、収録された八戸市史編纂委員会の方々のご苦勞に敬意を表したい。今後、八戸藩に関係する自治体史として、『青森県史 資料編近世5 八戸藩領』などが刊行予定であるが、本書とともに多く活用され、研究成果が蓄積されていくことを期待して擲筆したい。

(B5判、五五二頁、八戸市、二〇〇八年三月刊、
価格五六〇〇円〈税込〉)

(つたや・だいすけ 弘前大学大学院人文社会科学研究所)

笹森儀助書簡集刊行委員会編

『笹森儀助書簡集』

飯島 渉

笹森儀助(一八四五―一九一五)は、弘前に生まれ、地方官吏としての生活ののち、西日本、千島・樺太、沖縄、さらに台湾、朝鮮、ロシア、中国への視察を試みた著名な旅行家である。晩年には、青森市長をつとめた。十九世紀半ば、東北に生まれた笹森が、なぜこうした軌跡をたどったのか? その教奇ともいえる人生は、さまざまな意味で私たちの関心を呼び起こす。

笹森の著作の中で最も有名なものは、一八九三年の沖縄への視察記録『南嶋探験』(一八九四年初版、一九六八年国書刊行会復刻、後に、平凡社東洋文庫、東喜望校注、一九八二―八三年)であろう。評者が笹森の事績を知ったのもこの記録を通じてであった。この中で、笹森は、過重な人頭税にんとうぜいとマラリアに呻吟する宮古や八重山の民衆の実状をつぶさに述べ、明治政府の無策を批判した。そのため、笹森には沖縄への理解者としてのイメージが定着している。

高等学校の副読本である、新城俊昭『沖縄史』(東洋企画、二〇〇一年)でも笹森の事績が詳しく紹介され、琉球新報社『新南嶋探験―笹森儀助と沖縄百年―』(同所、一九九九年)は、『南嶋探験』の叙述から説き起こし、沖縄の現状や課題を展望している。

笹森の試みた旅行の厳しさとは比べくもないが、評者もいくつかの

地域を訪れ、八重山や宮古のマリアの歴史を調べるうちに、笹森の言説に共感した。そのため、従来の研究では比較的言及の少なかった奄美大島島司時代の台湾視察や東亜同文会の活動の一環として朝鮮に日本語学校を設立した時期の活動を論じた小文を書くことになった。それは、評者が進めていたマリア研究の一部だったのだが、友人の中には評者がアジア主義の研究に転じたとは勘違いした人があったほどである。

笹森には著作の他に青森県立図書館や弘前市立図書館が保存・公開している書簡などの史料があり、その一部は公刊されている^③。しかし、それらは奄美研究などの文脈の中で整理・公刊されたものであり、笹森の人物像をトータルに論じるためには十分ではなかった。

こうした中で、本書は、笹森の曾孫にあたる笹森靖司氏のもとに残されていた約五百点に上る書簡（笹森に宛てられた書簡および笹森自身の書簡）などを周到な配慮のもとに翻刻したもので、笹森研究にとどまらず、近代日本の政治や文化、さらに、笹森の歩いたさまざまな地域との関係史において貴重な史料である。

本書の刊行の意義は、まず、笹森に宛てられた書簡や笹森自身の書簡を、簡便に利用することができるようにしたことにある。評者は、編者の一人である小林和幸氏の手元の史料の写しを拝見したが、正直なところ、まず読めない。特定の人物を研究対象とするのであれば、くずし字にもある程度の規則性があるから、史料を読み進めるうちには、しだいにそのくずし方にも慣れてくるであろう。しかし、本書は、それぞれ背景の異なる数多くの人物からの書簡を翻刻したものであり、その困難さ

は容易に想像がつく。実際に翻刻を進められた方々の努力に敬意を表したい。

本書の刊行によって、笹森研究には新たな領域が開拓された。すなわち、笹森の著作からは十分にわからなかった交友関係が研究の視界に入ってくるようになった。人物研究は、第一にその著作を研究する必要がある。それはもちろん重要で、研究の第一段階であろう。しかし、著作はつねに「書きたかったこと」あるいは「書いてよかったこと」を記したものであるから、本来、日記や書簡などと関連付けながら周到な史料批判が行われるべきものであろう。その意味で、本書の刊行によって、複眼的な視野から笹森の軌跡を位置づけることが可能になった。

笹森は、評者のような門外漢にもさまざまな想いを抱かせる魅力的な存在である。その魅力の源泉は、なんといってもフットワークの軽さにある。一九世紀の半ば、笹森にとって、関西や九州はまさに異国であつただろう。そして、笹森は、さらに千島や沖縄、そして台湾や朝鮮、中国、ロシアへも足を運ぶ。

本書をひもとくとき、年譜によってあらためて笹森の軌跡を確認して印象的であつたのは、笹森が沖縄の視察に旅立つたのは、なんと四十八歳、台湾調査は五十一歳、朝鮮半島での活動は五十四歳からのことであつたということである。笹森の行動力には驚嘆させられる。考えてみると、このことは笹森が同時期の対外硬派などの中では、ある意味で「けむたい存在」であつたことも意味しよう。

評者にとって、もつとも関心があるのは、笹森の「眼差し」の根底にあるアイデンティティのあり方である。笹森の明治政府への批判は、先島の日本への帰属意識を喚起するためのものだったからである。

明治三十年六月の野村政明宛の笹森の書簡には、「台湾土匪の騷擾や文武官の解怠や世間に蝶々囁々するとも政府の方針確定不致候ては幾万人の人材登用するも組織法律規則棹上にて幾万製造するも台治には寸毫の益有之間敷候」と述べ、「然るに島津家当時の治□機宜に適し一度干戈を用ゐし爾来三百年の久敷に亘も恭順終始一途に出てたるは賛美の言葉尽す処にあらず、台治経略に執て以て法と為すべし」(一八〇頁)とある。この部分は、刊行された記録からはかなり踏み込んだ内容に見える。

本書所収の笹森宛の書簡と笹森自身の書簡の意味は、笹森のおかれた時代の文脈の中で考えられるべきである。その意味で、河西英通氏による本書の解説「笹森儀助と近代日本」は、近年の研究状況の紹介も含め、書簡を読むための背景をていねいにトレースしている。

河西氏は、その中で、生涯の多くを旅にあつた笹森は孤独だったのか、という問いを発している。河西氏自身の見解は、読者実際に解説にあつていただくこととして、評者なりにこの設問に答えるとするれば、笹森は本質的に孤独ではなかったと言えるのではないか。すなわち、笹森にはもどるべき故郷があり、同時に、「日本人」としてのアイデンティティを強く意識していたからである。

笹森のアイデンティティの確立には、十九世紀後半から二十世紀初頭の国際情勢が大きく関わっていた。すなわち、周辺地域への旅行を通じ

てアイデンティティを確認することになったのである。このことは、笹森が、当時の文脈では、対外硬派としてのアジア観を持っていたことと関わっている。しかし、それでは、何故、笹森は常に自らのアイデンティティの確認を外との関係から行つたのであろうか。それは今日の意味においては問題含みであるが、評者はそれを批判することによって、問題を単純化することにはくみしない。また、笹森を称揚するだけでも、その軌跡に対して礼を失することになると考える。重要なことは、歴史的文脈の中で笹森の業績を位置づけ、そこから何を学ぶことができるのかという視点であるように思われる。

近年の日本社会はかなり内向きになっているといわれる。事実、外国への旅行は団体旅行はともかく、若い世代が貧乏旅行をすることはしだいにまれになっているといわれている。このことは、現在の日本社会のあり方を反映しているであろう。

結局のところ、笹森は何を見たのであろうか？ この書簡集を見る中で、最も気になったのは、私たちが、事実と認識の差異を最終的にはうめることができないという厳然たる現実である。すなわち、史料はある意味で、「笹森が何を見たかったのか」を示している。私たちが史料として分析する対象はつねにそうしたバイアスを含む。それを踏まえたうえで、笹森を議論するとき、本書はきわめて重要な認識の系譜を私たちに示していると考えられる。

註

(1) 飯島渉「笹森儀助のまなざし―『台湾視察日記・台湾視察結論』(一)

八九六年）を中心に―』『歴史評論』第六一四号、二〇〇一年六月。

（2）飯島渉「笹森義助再論―義和団戦争時期の朝鮮・ロシア・中国視察を中心に―」愛知大学現代中国学会『中国21』第一三号、二〇〇二年三月。

（3）鹿児島県立図書館奄美分館『奄美史料（九） 笹森儀助大島島司中島庁関係資料（二）』同所、一九七九年三月、「南嶋事務私見概目」『奄美史料』（二〇） 笹森儀助大島島司中島庁関係資料（二）、一九八〇年三月。

（A5判、三七二頁十一八頁、東奥日報社、二〇〇八年、五二五〇円）

（いいじま・わたる 青山学院大学文学部教授）

『青森県史 資料編 近現代5』

復興と改革の時代』

河西 秀哉

「ユニークで、おもしろい！」―それが本書の最初の読後感だ。それゆえ、この書評の執筆が楽しみとなった。ところがしばらくして、引き受けたことを後悔し始めた。準備のため、本誌に掲載された『青森県史』近現代1～4の書評を拝読したのだが、その中では私の尊敬する先学の研究者が、すでにこのユニークな県史の特性を十二分に評価し、研究史上へ適切に位置づけている。今更私が書評したところで、屋上屋を架すだけではないか。そのような思いを持つようになったからである。

しかし、だ。まだ浅学の私が、本書を読んでなぜ「おもしろい」と感じたのかを書くことは、『青森県史』の魅力をこれまでとは違った角度から伝えることになるかもしれない。若手研究者が自治体史というものをどのように考えているか、読者のみなさんに伝えることができるかもしれない（そしてそれ以上に、書評を執筆することは私自身の勉強にもなる！）。そのように考え直し、現在この書評を書いている。冒頭から言い訳めいたことを述べてしまったが、そのようなスタンスで執筆しており、書評というよりも感想文に近いかもしれない。お許し願いたい。なぜ本書は「ユニーク」なのか。それは目次を見るとわかる。

総説

第一章 敗戦と占領